紹　介

●Ridgeway: The Early Age of Greece, Vol. II.

一九〇一年第一卷が刊行されて後學界に於ける待望久しかりし名著の第二卷である。著者 Sir William Ridgeway は既に一九二六年八月長逝し、本卷は其遺志により A. S. F. Gow 及び D. S. Robertson 兩氏の手で編纂された。

著者は第一卷に於て、ミケネ文化はアカイア人によつて希臘に齎されたとする從來の定說に反して、其は新石器時代以來の希臘土着民なるペラスギス人の固有文化であり、ペラスギス人を克服して希臘の主となつたケルト系の種族が希臘人によつてアカイア人と呼ばれホメロス時代の文化を形成するのであるとの見解を主張し、學界に異常なる反響を喚起したのであつた。而して第一卷が問題を專ら考古學的・言語學的觀察の下に檢討したに對して、第二卷は社會人類學的見地より主として慣習・制度・宗教に考察を進めて第一卷の所論を裏付けんと試みたものである。全卷を分つて四章とし、第一章に於て kinship and marriage に對する觀察を述べてペラスギアンは女系相續であるがアカイア人は男系相續であると結論し、第二章に於ては殺人罪に對する觀念がペラスギス人とアカイア人とに於て相異る事を說き、第三章は兩種族間の庶物崇拜・トーテム・祖先崇拜の有無を比較して差異の存する事を明かにし、最終の一章に於てはアカイア人がケルト系なる事を立證せん爲に眼を Ireland in the Heroic Age に轉じてゐる。

著者が第一卷の序文に於て『目下準備中であり不日發行されやう。』と豫告した此の第二卷が三十年もの久しき間吾人に見ゆるに至らなかつた理由は、兩編者の序文が述べて居る如く、著者が第一卷發行の後間もなく行はれた Sir Arthur Evans による Crete 島の劃期的新發掘及び其に續く幾多の貴重なる考古學的發見の結果に期待して、愼重に一層精細適確なる事實を把握せんとて滿を持

した故である。卽ち、發行の遲延により、本卷が世の待望に報ゆる所愈大なるを加へたものと信ぜられる。

尙ほ、卷頭に A. J. B. Wace 氏の Introduction がある。十二頁の短文であるが、以て Ridgeway の說に對する學界の動きを察する事が出來やう。(Cambridge University Press, 1931. 8vo, 30s. net 第一卷も昨年改版された。)〔水川〕

●THE REIGN OF TIBERIUS, F. B. MARSH.

グラックス兄弟の社會運動以來、約百年の間武力鬪爭に迄發展したローマ共和末期の內亂を統一し、ローマに再び平和と繁榮とを齎さんとした者のうち、特に注目さるべきはカエサルとアウグスツスとであつた。前者は當時尙强靱にローマ人の精神を指導して居るロマンドムを越えて、一路モナルヒーに突進して紀元四十五年のカタストローフを惹起し、後者は、一方に於ては、よくローマ精神を尊重し、他方に於ては、偉大なる個性の出現とその統治を翹望する社會的要求に應じて、此處に政治形態としては共和的な元老院政治と、事實上 predominat な意味に於て彼の專政とを含む、所謂 principate を創立した。此二元的な政治形態が、ディオクレティアーヌス帝による純然たる一元的な Dominat 確立を見る迄如何なる歷史的過程を辿つたかは、ローマ帝政史上最も注目さるべきことに屬する。先に The foundation of Roman Empire を著して、アウグスツスの principate が如何にして、又何故に成立したかを詳述した者が、先づそれを繼承したティベリウスの政治傾向を研究した所以も亦そのためであることは、著者自身の手になる本書の序文及第八章に說く所によつて明である。

著者は先づ第一章 Tiberius and his Historians に於てティベリウスに關する根本史料として、タキツスの年代記、ディオ・カシウスのローマ史、スエトニウスの皇帝傳を擧げ、第一のものを以てその最上のものと說き、それに對して比較的詳細な批評をなして居る。而して一般にローマ人の手になる歷史に對しては The Romans